

ごあいさつ 2

対談 インドと日本の新たな関係を探る 4

アフターブ・セット 駐日インド大使
 入山 映 笹川平和財団理事長

事業概要 11

一般事業

- . 多元的価値観の共存に向けて 11
- . 豊かな社会の創造と民間非営利活動 17
- . 世界の中の日本とアジア 23

特定基金事業

- 笹川太平洋島嶼国基金事業 25
- 笹川日中友好基金事業 30
- 笹川中欧基金事業 37
- 笹川南東アジア協力基金事業 40

事業総括 46

2001年度事業総覧 48

2001年度財務報告 52

役員・評議員名簿 54

職員名簿 55

本文の見方

1. 事業区分

2. 事業名

3. 事業形態*および実施者名

4. 事業費**

* SPFの自主事業については「自主」、他組織に助成金を支出した場合は「助成」(事業費の全額を助成した場合)もしくは「部分助成」(事業費の一部を助成した場合)、他組織に事業を委託した場合は「委託」と表記しました。

** 2001年度の事業費を掲載しました。なお、完了事業については事業費総額も表示しました。

 で表記した事業は、前出の  の事業を構成する事業です。

新世紀は、2001年9月11日の米国における同時多発テロという衝撃的な出来事で幕を開けました。この事件によって、01年はかつてなく「イスラム」が注目を浴び、米国を核とする「ユニラテリズム」の功罪、グローバリズムがもたらした負の側面について議論された年となりました。

昨年度の年次報告書のごあいさつで、私は次のように申し上げました。

「笹川平和財団（SPF）が設立されて15年。（中略）（世界の）激動が果たして一段落したのか、それともまだその過程にあるのか、判然としません。しかし、（中略）いくつかのはっきりした方向が見てとることができるようになりました」

しかし同時多発テロは、私たちが予測だにしなかったさまざまな新しい問題を提起しました。

アルカイダは「非営利組織」です。非人道的行為に走る組織とそうでない組織を、どこで区別するのでしょうか。また、危険な意図をもつ組織に対して、どのような規制を加えればいいのでしょうか。あれほど大がかりなテロ行為が、この高度情報化社会にあって未然に阻止されることなく実行できたのはなぜでしょうか。

同時多発テロの実行者（アルカイダ）は、この事件を「ジハード」（聖戦）と位置づけました。このことは、イスラムから遠い存在である人々にも、またムスリムにも、イスラムにおけるジハードとは何か、という問いを投げかけました。米国は、「世界の警察官」としてアルカイダ一掃のための戦いを始めました。米国を含む西側は、これをテロ撲滅戦争であると主張する一方で、パレスチナ人による自爆テロにイスラエルが攻撃を加えていることについては、テロに対する報復と位置づけています。この違いは何なのでしょう。



これらの問題が、従来にない新しい「尺度」が必要になったことを示しているのは明らかです。

高度情報化社会にあって、さまざまな価値観や使命感の共有のために、非営利組織が「仕切り役」としての役割を果たしていくことは間違いありません。しかし、その「仕切り方」が従来の尺度では計りきれないことを、同時多発テロは示唆しているのではないのでしょうか。

SPFは第3期中期事業ガイドラインの重要な方針として、イスラムをはじめとする「異文化・異文明相互間の対話の試み」を掲げています。同時多発テロは、いまこそ多様な文化、伝統、宗教、人種、歴史を認めあい、理解しあうための対話が必要であることを私たちに示しました。また、アジアが世界政治の中で従前よりもその重要性を増してきたこともまた、否定しようもありません。そこに、アジアの財団としてのSPFが果たしうる役割があることは明らかです。

アリストテレスの『詩学』に、「ペリペティア」(逆転)という言葉があります。「役割の逆転」をいつも考えておかなければならない、つまり「繁栄を支えた条件が次の発展の段階では逆に阻害要因となる」ということです。この言葉のもつ意味を十分に吟味し、SPFは「何をなすべきか」「何をなさざるべきか」について真摯に考えていきたいと思えます。

皆さまの、これまで以上のご助言、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

笹川平和財団会長 田淵 節也

インドと日本の新たな関係を探る

アフターブ・セット 駐日インド大使
入山 映 笹川平和財団理事長

無知は偏見を生みます。知の汚れを知らない^{みどりこ}嬰兒の眼が、より真実を見抜くことはあるかもしれませんが。しかし、我々が現実の生活を生きているこの社会では、「知る」ことの意味は「異なってある」ことを認めあうためにも、きわめて大きいのです。

SPFが異文化・異文明間の対話に関心をもった動機はここにあります。

そして、より「知られざる」文化的背景として、我々はまずイスラムを選択し、相互理解のための事業に取り組んできました。2001年9月11日の同時多発テロに先立つこと4年です。

もとより、この作業もまだ十分というには程遠いものがあります。しかし、10億のムスリムに対する理解が多少なりとも深まるにつれ、それとほぼ同数の人々が精神生活の中心におく、いまひとつの文化が視界に浮上してきました。

ヒन्दゥーです。

仏教の淵源でもあるこの宗教、あるいは文化について、いかに我々は知るところが少なかったことでしょうか。

SPFは、ヒन्दゥー理解に向けての第一歩を踏み出そうと思います。この対談は、いわばその前奏曲です。

入山 映



インドにおける民主主義の歩み

入山 映 長年、疑問に感じてきたのですが、インドの民主主義は、過去の英国統治と関係があるのでしょうか。

アフターブ・セツト 非常にいい質問です。多くの人々が、民主政治とは18世紀の議会政治の賜物であり、最初に英国で発生し、米国の独立革命からフランス革命を経て徐々に発達したと考えています。しかし実際には、ギリシャやインドの歴史をみればわかるはずですが、インドではブッダの時代にすでに共和国が存在していました。

ブッダは王家の出身ですが、当時のインドでは多くの共和国が栄えていて、ちょうど古代ギリシャのようでした。ペリクレスの時代からアテネは民主制を敷いており、プラトンやアリストテレスは、健全な共和国に必要な要素を定義しました。同じようにインドでも2000年前にはすでに共和国が存在し、発展していたのです。マケドニアのアレクサンダー大王は、王であると同時にプラトン・アリストテレス学派の徒でもあり、民主主義をよく理解していました。そして彼が理想に燃えてインドに入った時、そこに王国と共和国の共存を目にすることになったのです。

入山さんのご質問に対する答えは、簡単に言えば「イエス」です。今日見られるような議会制民主政治は立憲革命の段階的進化によるものです。

教育を受けたインドのエリート層の意識の高まりにつれて、英国人は、このような変化を認めざるをえなくなりました。インドのエリート層は、19世紀初頭から英国で教育を受けるようになり、それに伴って自由主義や民主主義の観念を発達させていきました。渡英して英国の民主政治を目の当たりにした彼らは、インドに帰って英国の統治者に本国と同じような代表機関の制定を要求するようになったのです。

1857年の最初の独立戦争以後、英国人はきわめて小さな規模で段階的に憲政自治を認めるようになりました。そして少しずつ、より広範囲の選挙権や、デリーにおける中央立法議会が認められるようになり、このデリーがインドの首都となりました。

インドはこのようにして、中央政府と地方政府の諸機関を完成させていったのです。英国方式では、中央で任命される知事と政治的に任命される総督が、議会・内閣で圧倒的な支配力をもっていました。現在ではこのようなことはありません。選挙で選ばれた首相と州長官が政治の実権を握り、大統領と知事は監督官としての役割を担っています。首相は大統領の名において行動しますが、実際



Akira Iriyama

の政治力は首相がもっています。

グローバル化によって失われていく言語たち

入山 米国同様、インドでは中央政府の権限は非常に小さいと一般に考えられています。現実はいかがですか。

セット 必ずしもそうとは言えません。中央政府は、圧倒的な財政力をもち、より多くのリソースを使うことができますし、対外関係も掌握しています。しかし憲法は、州の権限をきわめて明確に規定していて、教育もこれに含まれています。中央政府の教育省は教科書を管轄していますが、教育関係の決定の多くは地方自治に委ねられています。また、各州は海外企業の誘致を積極的に行っています。たとえば、北インドにはスズキやホンダなどの日本企業がすでに進出していますが、ハリヤナ州長官は2000年10月に来日し、日本の投資家候補と直接面談しました。

入山 その傾向は、今後も続くと思われませんか。

セット そう思います。グローバル化が進んでいますからね。私たちは多くの意味で「地球村」に住んでいるとすることができますが、人間は非常に多様でバラエティに富んでいますから、どれだけグローバル化が進んでも、人間の多様性を打ち消すことはできないでしょう。また、そんなことがあってはなりません。

グローバル化によって、古い言語や方言が日々消滅しつつありますが、これは非常に悲しむべきことです。今後は、各地域がもっと自己主張できるようにしていかねばなりません。

入山 批判されるべきグローバル化の波もありますね。

セット そのとおりです。シアトルやジェノバで行われたWTOの会議を思い出してみてください。過度のグローバル化によって、個々の地域や家庭が画一化していく不安が話題になりました。画一化の波には言語も含まれていて、私たちがいま話している英語が「独裁言語」になりつつあります。これには大きなメリットもありますが、一方で世界に大きな危機をもたらします。個々の言語とその文学の美しさが失われていくことは、非常に悲しむべき事態です。

「アジア性」の背後にあるもの

入山 私たちは、アジアの声を広く世界に紹介するプログラムを行っています。その目的は、アジアの個性を再発見することにあります。アジアはいま、単なる地理的名称になってしまっていますが、私はアジア固有の文化的規範や共通の特



Aftab Seth

徴が必ずあると思っています。大使ご自身は、インドから見て「アジア性」を感じることがありますか。

セツ 「アジア性」という言葉は、かつて侮蔑語でした。しかし、実際には非常に可能性をもった言葉だと思います。岡倉天心（哲学者・美術評論家。1862～1913年）は、それをよく理解していました。彼は世界文化や、アジアの枠を超える人道主義の存在を認識していましたが、彼が見ていたものは、インドのヒンドゥー教および仏教から生まれ、中央アジアへと広まった思想ではないかと思いません。

アフガニスタンを含む中央アジア全域が、かつては仏教国だったことを思い出してください。岡倉天心の言うように、中央アジアの国々やその周辺の中国、朝鮮半島や、日本などは、特に精神面で仏教思想に大きな影響を受けています。ヒンドゥー教、仏教を離れてアジア固有のものは見つけることができないのではないかと思います。

岡倉天心らが考えた「アジア性」は、おそらくパレスチナやサウジアラビアで生まれた一神教文明、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラムとは相容れないものだったでしょう。

入山 ヒンドゥー教も一神教ではないのですか。

セツ ヒンドゥー教は非常に包容力があり、一神教でも多神教でもあると言えます。ヒンドゥー教では、人間の潜在意識に深く分け入り、哲学を高度に発達させることに多くの時間を費やしてきました。この文化はフロイト誕生のずっと以前からあったものです。

入山 ブラフマン（梵。万物に偏在する「神」）に至るには、ジュニャーナ（智）の道、カルマ（業）の道、バクティ（信愛）の道という3つの方法がありますね。

セツ それらはそれぞれ魂の自由を勝ち取り、宇宙の魂と1つになる方法として、異なる学派で発達したものです。それは人間存在の究極の目標であり、それを達成するためには信仰、学問、瞑想など、さまざまな道があります。バクティの純粋な信愛を通じて神を恋人とすれば、神への信仰は恋人への愛と同じになり、恋人に歌を歌うように神のために歌えるようになるでしょう。また、カルマの道とは、ただ現世で生きて働き、その結果や報いを考えないということです。

ヒンドゥー教とインドの近代化

入山 現代インドとその民主主義、そしてヒンドゥー教との関係についてご意見をお聞きしたいと思います。ヒンドゥー教が近代化の障害となっていると考える人もいれば、この考えに強く反対する人もいるようですね。



セット 私はある理由から、ヒンドゥー教は近代化と非常によくマッチすると考えています。それは、ヒンドゥー哲学では個人が非常に重視されているからです。自分の道は自分で選ぶことができ、完全な個人の選択の自由があります。また、ヒンドゥー教には聖書がありません。神は1つでもいいし、1000でもいいし、ゼロでもいいのです。ジャイナ教も仏教も、バラモン（カーストの最上位の階層。司祭者、宗教教師）の権威に対抗したヒンドゥー教の異端宗派から生まれたものです。

仏教やジャイナ教を含むヒンドゥー教の歴史そのものが、民主主義の発達過程でもあったのです。その過程で人々は信仰の自由を手にしていったわけですからね。この意味で、イスラムのような一神教信仰よりも、ヒンドゥー教の歴史は民主主義の発展に益するものであったと言えます。

もっとも、イスラムも人を厳しい制度で縛りつけるものであると誤って解釈されてきましたが、本来は決してそのようなものではありません。開祖ムハンマドは、「個人と神の間をさえぎるものは何もなく、人と神は直接つながっている」と言いました。ですから、イスラムも本質的には個人主義的信仰であるということが出来ます。

しかしカトリックでは、確固たる司祭階級が存在し、真の民主主義への道は閉ざされています。ですから、もしローマ・カトリックとヒンドゥー教のどちらが民主主義への障害を内包しているかと問われれば、私はヒンドゥー教ではなく、ローマ・カトリックだと答えます。

入山 ヒンドゥー教にはカースト制度があります。社会階層が生まれたときから決まっている制度は、民主主義の理念と相反するのではないのでしょうか。

セット カーストから逸脱することができないのは事実です。しかし、区分された社会階層の中で活動し、不必要な搾取・差別の感覚をもたずにすむのですから、争いのない社会で皆が総体的に満足を得られるという見方もできます。ピラミッドの中で常に競争を繰り広げなければならない社会では、社会闘争が起こりやすくなります。ですから、闘争の必要がなければ、社会はより平和で調和のとれたものになりうるという議論も成り立つことになります。

入山 カースト制度はあくまで社会制度であって、ヒンドゥー教の教えではないと思いますが……。

セット そうです。カースト制度が発達したのはかなり後のことです。正直に言えば、これまで行われてきたカースト制度には、人道的にきわめて残忍な部分があり、非常に暗い側面もあります。しかしこれは、最初からそうだったわけではありません。

カースト制度は何世紀もかけて発達してきましたが、最初はヨーロッパのギル



ド制のようなものでした。それは社会の職掌分業を規定するものであって、日本の土農工商と似た面がありました。しかし、日本では、職掌区分は職業のみの区別にとどまっていたね。

入山 土農工商は神道の一部ではなく、あくまで社会制度でした。インドのカースト制度は、ヒンドゥー教となんの関係もなかったのでしょうか。

セット ありませんでした。カースト制度は、社会的に導入されたものです。ヴァルナと呼ばれるカースト制度は、そもそも社会の職掌区分制度であり、社会の階層化を意図したものではなかったのです。ところが、上級カーストが社会を階層化し、経済力を維持し、社会を政治的に支配する上で都合のいい制度だったため、彼らはこれを世襲制にすると非常に便利だと考えたのです。

これからのインドと日本をつなぐもの

入山 日印国交50周年にあたり、両国間に何を期待すべきでしょうか。

セット 文化面では、日本はインド社会にとってより大きな意味をもちつつあります。開発という観点からは、ただ工業化のパターンをなぞるだけが能ではないという考えがインドの人々の間に出てきています。これは京都議定書につながる考え方です。しかし私たちは、大災害でも起こらない限り、京都議定書が単なる要求基準ではなく、世界にとって絶対の必要事項であるということを理解できないのかもしれないかもしれません。

ヒンドゥー教、神道、仏教には、自然に対する畏敬の念があります。一方、聖書的概念では、人間は超越した万能の存在である神によって創造され、万物・自然の長として地上にあり、自然は万能の神が人間という特別の被造物に与えた贈り物です。自然を意のままに使い、土地は思うままに耕作・掘削していいのです。両者の間には大きな隔たりがあります。私たちは、このヒンドゥー教、神道、仏教的な考え方をもっと広めていくことができるのではないのでしょうか。聖書的観念から産業革命が生じ、英国が経験した児童労働の恐怖も、米国の奴隷制度の悪夢も、そこから生まれたのです。

日本は、自然に対する強い畏敬の念があったにもかかわらず、明治維新以降、それは忘れ去られてしまいました。これによって、水俣病をはじめとする多くの公害が引き起こされました。日本ではその事実が認識され、環境保護の必要性もすっかり理解されていますが、いまなお環境破壊を止めることができずにいます。古い畏敬の念を取り戻すことが、いま大きな助けになるのではないのでしょうか。

入山 おっしゃるような自然との共存、そして自然に対する畏敬の念をもつことは、言うは易く行うは難しだと思います。どのように実際の行動を起こしてい



たらいいのでしょうか。

セツト 国連や京都議定書を活用すべきです。国連は、不完全ではありますが、人類が20世紀に実現した最高の成果の1つです。国連がなかったら、どんなにひどい事態が起こっていたことが……。国連があったことは幸いでした。

入山 印パ関係について、国連は機能していますか。

セツト 国連はカシミール問題を解決することはできませんでしたが、だからといって私たちの国連への信頼が減るわけではありません。それは、パキスタンも同じだと思います。

入山 国連の役割や、お話しのような考え方を実際に進めていくにあたって、ほかにご意見はありますか。

セツト インドと日本は、いつまでも肩越しに見合っているのではなく、お互いに向き合った関係を築かなければなりません。核の傘に庇護されてはいますが、日本が非核政策をとっていることは広く知られています。しかし、インドほど核武装を好まない国家はありません。

交換留学のように、草の根レベルでできる日印交流は非常にたくさんあります。ムンバイ（ボンベイ）やデリーの学生が、金沢や宮崎の学校を訪れています。友情は、そうして築かれていくものであり、対処不能に思える難問も、そういう中で自然に解決されていきます。

ですから私は、このような公的レベルやNGOレベルの交流を続けていくことで、両国の国民が「日本とインドはまったく同じ非核の理念をもっていて、平均的日本人もインド人も、ともに核兵器の保有・使用に対する忌避感が意識に強く定着している」ことを理解できるのではないかと考えています。私が、インドと日本は本質的友好関係を結ぶことができると考える理由はここにあります。

入山 核保有国であるインドが核反対を唱えることを、偽善的だと考える読者もいるかもしれませんが……。

セツト もしも偽善があるとすれば、その偽善も日印両国で共有されるものでしょう。日本は非核宣言をしていますが、一方で米国の核の傘による庇護を受けています。インドもまた、非核宣言をする一方で核兵器を保有しています。もし偽善という言葉を使うのであれば、その偽善も両国共通のものと言えるわけです。しかし、それで私たちのお互いに対する信頼が薄れるわけではありませんし、両国の国民レベルの崇高な目標に対する意識の高さも変わるわけではありません。

入山 本日は貴重な時間を割いていただき、本当にありがとうございました。